

フランス語とスペイン語における 不定冠詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Indefinite Article in French and Spanish

Takeshi FUJITA

要旨 : The indefinite article occupies an important position in the article system in French and Spanish. We examine the syntactic distribution of the indefinite article in the corpus (a French text and its Spanish translation, a Spanish text and its French translation, and the French and Spanish translations of an Italian text), taking into account the distributional correspondence between the indefinite article and other articles, the null article included. We conclude that the indefinite article has a close connection, especially in Spanish, with the null article and a functional continuity with the definite article. It is also shown that the number category fills a crucial role in the article system in both these languages.

キーワード : indefinite article, French, Spanish

0. 序論

冠詞という文法カテゴリーを有する言語において、この要素は名詞句において極めて重要な文法的役割を果たす。ロマンス諸語は、英語等に見られる定冠詞・不定冠詞の他に、部分冠詞という独自の要素をもつ点で特異であると言える。それぞれの言語において冠詞について様々な観点から研究が進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。

本稿では、フランス語とスペイン語の冠詞体系を対照的に考察すべく、不定冠詞の分布を詳細に検討し、他の冠詞との対応という点に焦点をあてて分析を進めていく。その際に、冠詞をはじめとする決定詞を全く伴わない無冠詞名詞句も考察の対象とし、無冠詞を他の冠詞と対等の地位を占める要素として扱う。これにより、定冠詞・不定冠詞という二項対立、あるいは定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という三項対立での見方

ではとらえられない冠詞の機能分化について、新たな視点を提示したい¹。

1. 両言語の冠詞体系

1. 1. フランス語

1. 1. 1. 冠詞のカテゴリー

多くの記述文法や論考において、フランス語は三種類の要素からなる冠詞体系をもつとされている。すなわち、西ヨーロッパの諸言語に一般的に見られる定冠詞・不定冠詞に加え、部分冠詞というカテゴリーが設定される²。

定冠詞の機能は、発話者(*locuteur*)と対話者(*interlocuteur*)のいずれにも既知である人やモノを指示する名詞の前に置かれるのが基本だが、種(*espèce*)・カテゴリーを対象とする用法もある(*Grevisse 1993*)。前者の用法は照応的(*anaphorique*)であり、定冠詞の歴史的起源である指示形容詞の機能を継承している。これに対して、二つ目の用法は一般化(*généralisant*)の機能であると言え、現代のフランス語が獲得したものである(*Wagner et Pinchon 1991*)。定冠詞は定(*défini*)³という意味以外には何らの意味的要素も含まないため、指示される対象が明確に同定されるという条件が満たされれば、あらゆる場合に使用可能である(*Martinet 1979*)⁴。定を示す要素としては、他に所有形容詞や指示形容詞が挙げられるが、これらと定冠詞が異なるのは、定冠詞は指示対象の拡張(*extensité*)の境界を定めるという量化(*quantifiant*)の機能しかもたない中立的な要素であるのに対し、他の二つの要素は特徴づけ(*caractérisant*)という別の機能も併せ持っているという点である(*Leeman 2004*)。

不定冠詞については、注記すべき点がある。英語やドイツ語等とは異なり、複数形が存在するのである。単数形については、他言語にも一般的に見られる特徴として数詞の「1」を起源としている。複数形の形態は、部分を表す前置詞«*de*»と定冠詞を組み合わせたものであり、その機能は、具体的な数が明確に示されない複数を表わすことにある。不定冠詞は、既知のもの、同定されたものとしては提示されていない人やモノを指示する名詞の前に置かれ、単数形に限って定冠詞と同様に総称的な価値をもつことがある(*Grevisse*)。フランス語では、不定冠詞は定冠詞と異なり、個別化(*particularisant*)の価値を獲得したため、物質名詞や抽象名詞の前に置かれることもある(*Wagner et Pinchon*)。不定冠詞複数形は、複数という概念は表すもののそれは弱い性質のものであり、場合によっては「1」という数を排除しない(*Leeman*)。

¹ 本研究は、平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 22520381) による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表するものである。

² このような見方はフランス語の冠詞の分析において支配的なものであり、*Grevisse, Wagner et Pinchon, Leeman* の他に、*Deloffre et Hellegouarc'h(1988), Hollerbach(1994), Judge and Healey(1995), Price(2003)* も同じ立場に立つ。*Martinet* は部分冠詞に関して、部分を表す«*de*»と現働化詞である定冠詞に分ける見方を提示しているが、基本的な考え方は共通していると言える。

³ 「定」とは、ある要素の存在が既に確立されていることを指す(*Leeman*)。一般化も定の機能の一つであると考えられる。

⁴ *Martinet* は、冠詞を現働化詞(*actualisateur*)というカテゴリーに属するものととらえている。現働化とは、ある要素について現実性を喚起する作用を指し、その作用を行う要素が現働化詞である。名詞の場合は冠詞をはじめとする決定詞(*déterminant*)が現働化詞である。

部分冠詞は、その機能の点では、数えられない名詞の前に置かれる不定冠詞であると言え、不定の量を示すのに用いられる(Grevisse)。Martinet は、その形態及び意味的価値から、部分冠詞と不定冠詞複数形を一つのカテゴリーとしてとらえ、部分詞« de »と現働化詞の組み合わせられた要素であると分析する。この見方は、通常のフランス語の冠詞のカテゴリー化とは異なるものであるが、Leeman においても同様の議論が展開されている。本稿ではこの見解に従い、今後いわゆる部分冠詞と不定冠詞複数形の総称として部分冠詞という名称を用い、これらの要素が同一のカテゴリー内に位置づけられるという立場をとる。

1. 1. 2. 無冠詞

フランス語においては、無冠詞名詞句の生起はかなり制限されていると言える⁵。Martinet は、無冠詞名詞句、すなわち現働化詞を伴わない名詞は現働化されていないのではなく、現働化詞以外の手段、すなわち文脈や統語的環境によって現働化されていると説く。Deloffre et Hellegouarc'h(1988)は、冠詞を伴わない名詞は一般化を超えた無限の拡張を表すものであるか、固有名詞のようにその特性上現働化する必要がない場合であるとする。

この現働化という観点からは、無冠詞は[一現働化]という特徴付けができる。これは、不定詞が[一時制]と特徴づけられるのと同じ手法に基づくものである。本稿では、不定冠詞と他の冠詞との対応関係を考察する上で、[一現働化]も名詞の指示対象を決定する機能の一つであると考え、無冠詞を冠詞体系の中に組み込むこととする⁶。

1. 2. スペイン語

1. 2. 1. 冠詞のカテゴリー

スペイン語は、二つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞と不定冠詞であり、フランス語のように部分冠詞というカテゴリーが設定されることはない⁷。それは、物質名詞や抽象名詞の不定量を冠詞として標示する要素が存在しないからである。

Satorre Grau(2000)によると、定冠詞の機能は、対話者(interlocutor)が発話者(locutor)と共有している、あるいは既に提示されていることによって、名詞句の指示対象を知っていることを示す。指示詞や所有詞と同様に、直示的(deíctico)で基本的に指示的(referencial)な要素であり、同定的(identificador)な機能を有する。また、定冠詞の大きな特徴として一般化(generalizador)の機能があり、名詞句によって指示され

⁵ Grevisse は、フランス語において普通名詞が冠詞を伴わない場合を、1)特定の統語的機能を持つ場合、2)特定の語の語彙的特性による場合、3)複数の名詞を列挙する場合、4)慣用句、5)動詞を伴わない名詞文に分ける。1)の統語的機能とは、a)名詞に後置される同格句、b)属詞、c)呼びかけ、d)別の名詞の特徴を表す補語、の四つに分類する。4)の慣用句において特に顕著なのは、動詞の目的語として動詞句を形成するものと、前置詞の目的語として前置詞句をなすものである。

⁶ この見方は、例えば生成文法の枠組みに従うと、決定詞の主要部の位置をゼロ要素 φ が占めているととらえることができる。ゼロ要素は、形式上は空であるが意味的には独自の機能を持ち、顕在的要素と範列関係(rapport paradigmatic)をなすため、両者は全く対等な統語的ステータスを有することになる。

⁷ Hernández Alonso(1984)は、冠詞というカテゴリーに含まれるのはいわゆる定冠詞のみで、不定冠詞は不定の数量詞として位置付けている。このような見方は一般的なものとは言えず、本稿では冠詞は定冠詞と不定冠詞からなるという立場をとる。

る種(especie)を集合全体として指示することによって総称的(genérico)な意味をもつ。Matte Bon(1995)は冠詞は演算子(operador)であるとし、1)発話者が名詞句に関して抽象的な性質のみならず、具体的な実体を問題にしていることを示す、2)既に先行文脈において現れた名詞を指示することから前提を構成する、という二重の機能を有するとする。

不定冠詞に関しては、単数形と複数形があるという見方が一般的である⁸。これは、不定冠詞複数形とみなされる要素が、不定冠詞単数形に複数を表わす形態素を付加した形式であることに起因している(« una » → « unas »)。ただ、不定冠詞複数形の機能に関しては二つの捉え方がある。一つは、寺崎(1998)の主張する、不定冠詞複数形は一部を除いて不定形容詞としての機能を持つとする見方である⁹。その根拠は、単数形の場合と異なり、不定冠詞複数形は生起が義務的ではなく、無冠詞の複数形名詞がかなりの頻度で生起するということである。もう一つは、Leonetti(1999)に代表される、不定冠詞複数形の機能は単数形と共通しているという主張である。不定冠詞単数形を用いる名詞句は量化表現であるのに対して、無冠詞の複数形名詞は非量化表現であり、不定冠詞単数形に無冠詞複数形が対応するとは考えられない。不定冠詞単数形に対応するのはあくまでも不定冠詞複数形であるとしている。

不定冠詞の機能に関しては、Satorre Grau は不定冠詞は提示詞(presentador)であり、名詞句の内容が発話者と対話者によって共有されていないことを示すとしている。従って、対話者が知らない新情報を導入するのに用いられる。定冠詞と異なり同定的機能はもたず、分類するのみである。定冠詞と共通する点として、不定冠詞も一般化の機能をもつ。不定冠詞の総称的意味は、集合に属する個々の要素を通じて種を指示することから生じる。Matte Bon は、不定冠詞の機能は、名詞によって表わされる概念を相対化し、言語外の指示対象に対応する具体的な個物に変換することであり、総称的な使用法もこの機能に起因するとする。

以上の議論は、フランス語の不定冠詞と共通するものであり、不定冠詞複数形を除いて、両言語において定冠詞・不定冠詞の機能に基本的な違いはないと言える。不定冠詞複数形の位置づけに関しては、1.2.2 で無冠詞との関係を考慮しながら考察する。

1. 2. 2. 無冠詞

スペイン語の無冠詞名詞句は、フランス語におけるそれよりも使用範囲が広いと言える。まず、フランス語において部分冠詞を用いる文脈において、すなわち数えられない要素を指示する名詞の場合に、スペイン語では通常無冠詞名詞句が生起する。また、部分冠詞の使用が義務的となるフランス語とは異なり、複数名詞が無冠詞で生起する例はかなり広く観察される。Martínez Álvarez(2000)は、複数を示す形態素が非連続的な要素¹⁰を指示する名詞を加算可能にすることで、名詞の現働化がなされるため

⁸ このような見方を提示するものとして、Satorre Grau, Matte Bon の他、López García(1998), Leonetti(1999), Salvá(1988), Butt and Benjamin(2004), De Bruyne(1995)が挙げられる。

⁹ 純粋に不定冠詞の機能として捉えられるのは、靴« unos zapatos (一足の靴) »やメガネ « unas gafas (一つのメガネ) »など、対になって一つの個体を形成しており単数形で用いられない名詞に用いられる場合である。

¹⁰ 一般に「数えられる」要素と呼ばれるものは、意味論的には「非連続的な」要素と捉えられ、「数え

に冠詞が必要とされないとする¹¹。Laca(1999)は、無冠詞名詞句は必ず文脈に依存して解釈され、それ自体で特定の個物や事物の部分を指示することができないと説明する。このため、話者の評価に関わる修飾要素を伴う場合には、不定冠詞の使用が義務的になるとする。

(1) a. Solía plantearnos unas preguntas difícilísimas.

不定冠詞複数形

彼は私たちに非常に難しい問題を提起したものだ。

b. Nos ofrecieron un vino delicioso. とてもおいしいワインが私たちに出了された。

不定冠詞単数形

Matte Bonは無冠詞名詞句においては演算子 φ が関与すると分析するが、この演算子は名詞によって表わされる概念・範疇を直接的に指示すると主張しており、Laca と基本的に同じ方向性にあると言える。

更に、数えられる要素を指示する名詞においても、スペイン語において無冠詞名詞句が単数形で用いられることがある。Martínez Álvarez は非連続的(discontinuo)な要素を表す単数形の名詞が主語として生起する場合には冠詞を義務的に伴うが、目的語の場合には無冠詞名詞句として生起することができるという事実を指摘する¹²。

(2) a. Ya tiene coche. もうあなたは車を持っています。

b. Hay perro. 犬がいる。

この場合の名詞句は特定の個別要素を指示するのではなく、名詞が表している集合に含まれる要素に共通の部分を指示しており、数えられる名詞であってもその集合を連続的(continuo)なものとしてとらえていることを示しているとする。また、Laca はこのような無冠詞名詞句の使用は例外的なものであり、より特定の条件、すなわち非連続的な要素を指示する名詞が単数形で生起するには、その存在が一般的に予想されるものであるという条件があると主張する。(2)では、車を所有するという状態や犬という動物の存在が文化的に十分予想される事態であるために、無冠詞単数名詞の使用が可能となる。

上記の議論をもとにすると、非連続的な要素を指示する名詞の場合、単数形では冠詞の生起が義務的であるのに対し、複数形では無冠詞名詞句が広く観察されると言える。言い換えると、不定冠詞の単数形といわゆる不定冠詞の複数形はその機能が異なっているということである。本稿では、フランス語の冠詞との対照という観点から、フランス語の場合と同様、不定冠詞複数形は部分冠詞として位置づけることとする。

られない」要素は「連続的な」要素と捉えられる。

¹¹ フランス語では、このような文脈で部分冠詞の使用が義務的となることから、複数を表わす形態素だけでは非連続的な要素を指示する名詞を現働化するには不十分であるということになる。

¹² (2b)の無冠詞名詞句は厳密には直接目的語ではないが、動詞« haber »は存在する事物を提示する機能をもつ。その意味で、「haber」に後続する名詞は対象としての意味役割を担っていると考えることができる。対象の意味役割を担う名詞句は、生成文法による分析では、基底において動詞の補部の位置、すなわち通常目的語が占める位置にあるとされる。つまり、「haber」に後続する名詞句は統語的には直接目的語と同じステータスをもつと考えられるのである。

1. 3. 両言語における冠詞体系の総括

以上の考察から、フランス語とスペイン語の冠詞体系は以下のように示される。

フランス語

定冠詞		不定冠詞	部分冠詞		無冠詞	
単数	複数	単数	単数	複数	単数	複数

スペイン語

定冠詞		不定冠詞	部分冠詞	無冠詞	
単数	複数	単数	複数	単数	複数

このように、フランス語とスペイン語では冠詞体系の基本的な部分は共通しており、唯一異なるのは、部分冠詞の単数形の有無である。部分冠詞単数形の果たすべき機能は、スペイン語においては無冠詞単数形が担うことになる。従来それぞれの言語において展開されてきた冠詞に関する分析に従うと、フランス語において存在する部分冠詞がスペイン語において存在しないということになるが、個々の冠詞のもつ機能を対比して考えると、両言語の冠詞体系に実質的には大きな差異が存在しないと結論付けられる。次節以降では、両言語の冠詞体系は基本的に同一であるという立場に立脚し、不定冠詞を中心にすえて両言語における冠詞の使用を対照的に考察することとする。

2. フランス語とスペイン語における不定冠詞の対応

本稿では、翻訳を用いて両言語の不定冠詞の分布を観察する。

2. 1. フランス語原典からのスペイン語訳

まず、フランス人作家アンドレ・マルロー(André Malraux)作の「人間の条件(La Condition humaine, Gallimard, 1946)」とそのスペイン語訳(César A. Comet 訳, Edhasa, 1979)とを対照する。結果は以下のとおりである。

フランス語原典における不定冠詞の分布

スペイン語においても不定冠詞で翻訳されるもの		1407
スペイン語において他の冠詞で翻訳されるもの		107
(内訳)	無冠詞	79
	定冠詞	22
	部分冠詞	6
スペイン語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		47
スペイン語において名詞句で翻訳されておらず、対応が見出されないもの ¹³		24
総数		1585

¹³ 対応関係が見出されない場合があるのは、翻訳のもつ内在的な性質による。すなわち、ある言語から別の言語へ翻訳する場合、単なる記号の置換とはならないのである。翻訳者の意図により、もとの言語における表現が、翻訳言語において異なる文の構造によって翻訳されることが少なくはない。本稿では、このような翻訳者の主観的な意図による変更と、両言語の性質の相違に起因する違いを峻別するために、統語的な対応関係が見出されない場合を考察の対象外とする。また、3節において不定冠詞を含む名詞句の文法機能の対応関係を考慮に入れるのもこのためである。

□ フランス語の不定冠詞⇒スペイン語の他の冠詞 の例
無冠詞

(3) a. Au repos, l'expression de Valérie était d'une tristesse tendre, ...

不定冠詞

休息している時には、ヴァレリーの表情はやさしい悲しさを漂わせていた。

b. Durante el descanso, la expresión de Valeria era de tristeza tierna, ...

定冠詞

(4) a. Pommettes aiguës, nez très écrasé mais avec une légère arête, comme un bec, ...

不定冠詞

とがった頬骨、ひしゃげたように低いがくちばしのようにかすかな鼻梁のある鼻

b. —pómulos salientes y nariz muy aplastada, aunque con la artista ligeramente

定冠詞

marcada, como un pico—

部分冠詞

(5) a. De temps à autre, un assaillant tirait encore sur l'une des fenêtres, ...

不定冠詞

時々、襲撃者が窓の一つをめがけてさらに撃った。

b. De vez en cuando, unos asaltantes disparaban aún sobre una de las ventanas...

部分冠詞

□ フランス語の不定冠詞⇒スペイン語の冠詞以外の形式 の例

(6) a. Achetait-il pour un Européen ?

不定冠詞

この人はヨーロッパ人のために買っているのだろうか。

b. ¿Compraría para algún europeo?

some

スペイン語訳における不定冠詞の分布

フランス語においても不定冠詞で現われているもの		1407
フランス語において他の冠詞で現れるもの		114
(内訳)	無冠詞	64
	定冠詞	37
	部分冠詞	13
フランス語において冠詞以外の形で現れるもの		25
フランス語において名詞句で現われておらず、対応が見出されないもの		22
総数		1568

□ フランス語の他の冠詞⇒スペイン語の不定冠詞 の例
無冠詞

(7) a. Lou s'épanouissait en sourire,... ルーは笑い顔を見せた。

b. Lu se esponjaba en una sonrisa.

不定冠詞

定冠詞

(8) a. L'auto dépassa un groupe de femmes, réunies sous la bannière « Droit de

定冠詞

s'asseoir pour les ouvrières ».

自動車は、「婦人労働者に腰かける権利を」と書かれた大旗の下に集まった女工たちの一団のそばを通り過ぎた。

b. El auto pasó por delante de un grupo de mujeres, reunidas bajo un cartel en que

不定冠詞

se leía: “Derecho de asiento para las obreras.”

部分冠詞

(9) a. Le crissement de son ongle retourné sur du fer-blanc fit grincer les dents de

部分冠詞

Katow ;

ブリキの上を引っ搔いている彼の爪の音は、カトフの歯をぎりぎりさせた。

b. El roce de su uña doblada sobre una hoja de lata hizo rechinar los dientes de

不定冠詞

Katow;

□ フランス語の冠詞以外の形式⇒スペイン語の不定冠詞 の例

(10) a. Il faut que je te dise quelque chose qui va peut-être un peu t'embêter...

some

たぶん少し嫌な気持ちをなさると思うけど、でもあなたに言っておかなきゃいけないことがあるの。

b. Es preciso que te diga una cosa que acaso te moleste un poco...

不定冠詞

2. 2. スペイン語原典からのフランス語訳

次に、スペイン人作家アルトゥーロ・ペレス・レベルテ(Arturo Pérez-Reverte)作の「アラトリステ I(El Capitán Alatriste, Alfaguara, 2001)」とそのフランス語訳 (Jean-Pierre Quijano 訳, Éditions du Seuil, 1998) を対照する。結果は以下のとおりである。

スペイン語原典における不定冠詞の分布

フランス語においても不定冠詞で翻訳されるもの		667
フランス語において他の冠詞で翻訳されるもの		76
(内訳)	無冠詞	22
	定冠詞	50
	部分冠詞	4
フランス語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		40
フランス語において名詞句で翻訳されておらず、対応が見出されないもの		81
総数		864

□ スペイン語の不定冠詞⇒フランス語の他の冠詞 の例
無冠詞

(11) a. Alatríste hizo un gesto negativo.

不定冠詞

アラトリステは否定の身振りをした。

b. Alatríste fit signe que non.

定冠詞

(12) a. ..., el hombre de la cabeza redonda introdujo una mano en el ropón oscuro...

不定冠詞

丸い頭の男は暗い色の外套に手を入れた

b. ..., l'homme à la tête ronde glissa la main sous la robe sombre...

定冠詞

部分冠詞

(13) a. Su afición a mi amo obedecía, entre otros, a un aspecto práctico:...

不定冠詞

彼が私の主人と親しくしていたのは、とりわけ実用的な側面によるところが大きかった。

b. L'estime dans laquelle le poète tenait mon maître obéissait, entre autres, à des considérations pratiques :...

部分冠詞

□ スペイン語の不定冠詞⇒フランス語の冠詞以外の形式 の例

(14) a. ..., hasta que al alba las tropas del rey nuestro señor lanzasen un ataque...

不定冠詞

国王陛下の軍が夜明けに攻撃を開始するまで

b. ..., jusqu'à ce que les troupes de Sa Majesté lancent leur attaque à l'aube...

所有形容詞

フランス語訳における不定冠詞の分布

スペイン語においても不定冠詞で現われているもの		667
スペイン語において他の冠詞で現れるもの		210
(内訳)	無冠詞	160
	定冠詞	49
	部分冠詞	1
スペイン語において冠詞以外の形で現れるもの		61
スペイン語において名詞句で現われておらず、対応が見出されないもの		97
総数		1035

□ スペイン語の他の冠詞⇒フランスの不定冠詞 の例
無冠詞

(15) a. Y para que se hagan idea vuestras mercedes,...

皆さんがご想像できるように

b. Pour vous en donner une idée,...

不定冠詞

定冠詞

(16) a. ..., y esbozó la sonrisa fatigada:...

定冠詞

疲れたような微笑みを浮かべた。

b. ...et ébaucha un sourire las :...

不定冠詞

部分冠詞

(17) a. ...había ido tras el coche de Martín Saldaña y sus corchetes con sólo mi jubón y unas calzas...

部分冠詞

私は、胴衣と長靴下だけで、マルティン・サルダーニャとその捕吏の馬車の後をついてきていた

b. ...j'étais sorti vêtu seulement d'un pourpoint et d'une culotte, derrière la voiture

不定冠詞

de Martín Saldaña et de ses sbires...

□ スペイン語の冠詞以外の形式⇒フランス語の不定冠詞 の例

(18) a. ..., indifferente al acuerdo que asignaba uno a cada cual,...

不定代名詞

それぞれ一人ずつを相手にするという取り決めに関係なく、

b. ..., indifférent à l'accord qui leur assignait à chacun une victime...

不定冠詞

2. 3. 他言語で書かれた原典からの両言語の翻訳

他言語で書かれた原典からの翻訳として、イタリア人作家イタロ・カルヴィーノ (Italo Calvino) 作の「木のぼり男爵 (Il Barone Rampante)」のフランス語訳 (Juliette Bertrand 訳, Éditions du Seuil, 2001) とスペイン語訳 (Esther Benítez 訳, Ediciones Siruela, 1998) を対照する。結果は以下のとおりである。

フランス語訳における不定冠詞の分布

スペイン語においても不定冠詞で翻訳されるもの		1347
スペイン語において他の冠詞で翻訳されるもの		312
(内訳)	無冠詞	215
	定冠詞	93
	部分冠詞	4
スペイン語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		81
スペイン語において名詞句で翻訳されておらず、対応が見出されないもの		106
総数		1846

□ フランス語の不定冠詞⇒スペイン語の他の冠詞 の例
無冠詞

(19) a. Côme est un nom de vieux.

不定冠詞

コジモってのは年寄りの名前だ。

b. Cosimo es nombre de viejo.

定冠詞

(20) a. ..., attendant qu'une grive vînt se poser sur une cime, ...

不定冠詞

ツグミが梢にとまりに来るのを待つて

b. ..., esperando que el tordo se posase en la cima de un árbol...

定冠詞

部分冠詞

(21) a. ..., une conjuration de palais, une jalousie de femme ou une dette de jeu

不定冠詞

l'auraient fait tomber en disgrâce...

宮廷の陰謀か、女の嫉妬か、賭け事の借金かで不興をかった。

b. una conjura de palacio o unos celos femeninos o una deuda de juego lo habían

部分冠詞

hecho caer en desgracia...

□ フランス語の不定冠詞⇒スペイン語の冠詞以外の形式 の例

(22) a. Naturellement, après un tel tapage, ils eurent de nouveau leurs persécuteurs à
不定冠詞

leurs troussees.

その騒ぎで、当然彼らはまたもや追手に追いつかれてしまった。

b. Con aquel jaleo, claro, reaparecieron sus perseguidores.

指示形容詞

スペイン語訳における不定冠詞の分布

フランス語においても不定冠詞で翻訳されるもの		1347
フランス語において他の冠詞で翻訳されるもの		139
(内訳)	無冠詞	43
	定冠詞	83
	部分冠詞	13
フランス語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		70
フランス語において名詞句で翻訳されておらず、対応が見出されないもの		128
総数		1684

□ フランス語の他の冠詞⇒スペイン語の不定冠詞 の例
無冠詞

(23) a. Un jour, il vit courir, ..., halètement farouche, ..., un renard.

ある日、キツネが吐く息も猛々しく走るのを見た。

b. Un día vio correr a un zorro: ...un bufido feroz,...

不定冠詞

定冠詞

(24) a. ...il se mettait à table la poche pleine de petits os tout épluchés....

定冠詞

身を削いだ小骨をポケット一杯にして食卓についた

b. ...venía a la mesa con un bolsillo lleno de huesecitos ya pelados,...

不定冠詞

部分冠詞

(25) a. ..., et il en sortit des Miscellanées d'aventures, de duels et de contes érotiques,...

部分冠詞

結局、冒険や決闘、艶話の寄せ集めになってしまった

b. ... y salió un florilegio de aventuras, duelos e historias eróticas...

不定冠詞

□ フランス語の冠詞以外の形式⇒スペイン語の不定冠詞 の例

(26) a. ...il avait fallu mon œil exercé pour la voir.

所有形容詞

それに気づくには、私の鍛錬された目が必要だったのだ。

b. ...se necesitaba un ojo tan experto como el mío para divisarla.

不定冠詞

2. 4. 総括

以上の三つのテキストを合計して、両言語の分布の違いを観察する。翻訳において名詞句の対応が見出されない例は、両言語の性質上の相違ではなく、翻訳における表現の選択に起因しているので、考察から除外する必要がある¹⁴。そこで、名詞句同士の対応関係が認められる例に絞って不定冠詞の分布をまとめると、以下ようになる。

フランス語テキスト

スペイン語においても不定冠詞で現われるもの		3421(80.7)
スペイン語において他の冠詞で現れるもの		629(14.8)
(内訳)	無冠詞	454(10.7)
	定冠詞	164(3.9)
	部分冠詞	11(0.26)
スペイン語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		189(3.8)
総数		4239(%)

スペイン語テキスト

フランス語においても不定冠詞で現われるもの		3421(88.1)
フランス語において他の冠詞で現れるもの		329(8.5)
(内訳)	無冠詞	129(3.3)
	定冠詞	170(4.4)
	部分冠詞	30(0.77)
フランス語において冠詞以外の形で翻訳されるもの		135(3.5)
総数		3885(%)

以上の数値を見てまず気がつくのは、両言語における不定冠詞の機能が基本的に同一であるにもかかわらず、不定冠詞以外の表現が対応している例がいずれのテキストにおいても1割を超えているということである。この割合は決して低いものではなく、次節において個別に考察を進めていく。

更に、両テキストにおいてこの割合に不均衡が見られることも分かる。不定冠詞を伴う

¹⁴ 査読者から、対応する名詞句がある場合でも同様の問題が起こっている可能性があるのではないかとの指摘があった。翻訳において異なる表現を選択する場合、基本的には語彙的な要素の選択（名詞句表現を動詞句で表現する等）に限られると考えられる。名詞句という同じ表現手段が選択された場合、冠詞という文法的な要素の選択には翻訳者の意図が反映される余地はあまり残されておらず、両言語の文法上の特質によって冠詞が選択されると言えよう。ただし、主語であったものを目的語にして翻訳する等のように文の構造を変える場合も少なくないので、本稿ではそのような場合を区別することとする。

名詞句以外の要素として現れる例は、フランス語テキストに対応するスペイン語が 818(総数の 19.3%) であるのに対して、スペイン語のテキストに対応するフランス語では 464(総数の 11.9%) となる。これは、スペイン語において不定冠詞以外で現れる場合よりも、フランス語において不定冠詞以外で現れる場合の方が頻度が低いということを示している。つまり、決定詞の体系において、スペイン語よりもフランス語の方が不定冠詞の果たす役割が大きいと言える。

では、スペイン語の決定詞の体系において、不定冠詞の比重が相対的に低いのはなぜであろうか。これは、前節で見たように無冠詞の果たす役割がスペイン語においては大きいためである。このことは、スペイン語の不定冠詞がフランス語において無冠詞で表される例が 129(総数の 3.3%) に過ぎないのに対し、フランス語の不定冠詞がスペイン語において無冠詞で表される例は 454(総数の 10.7%) にも及ぶという数値が如実に表している。スペイン語においては、無冠詞がフランス語における不定冠詞の役割を少なからぬ割合で担っているのである。

3. 名詞句の文法的機能に関する分布

本節では、フランス語の不定冠詞とスペイン語の不定冠詞がそれぞれ異なる冠詞に対応している例について、無冠詞・定冠詞・部分冠詞に分類した上で、それぞれにおいて名詞句が文において果たす文法機能がどのようになっているかを観察する。

3. 1. 不定冠詞全体

まず、不定冠詞によって導かれる名詞句が、両言語のテキストにおいてそれぞれどのような文法的機能を果たしているかを観察する^{15,16}。

フランス語

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語	倒置主語	属詞	名詞文	同格	分詞構文	副詞
C.H.	1584	690	332	193	58	171	99	19	14	7
AL.	1035	459	307	62	27	87	44	28	12	8
B.R.	1846	810	504	136	76	162	71	38	16	32
計	4465	1959	1143	391	161	420	214	85	42	47
(%)	(100)	(43.9)	(25.6)	(8.8)	(3.6)	(9.4)	(4.8)	(1.9)	(0.94)	(1.1)

¹⁵ 表において、C.H.は「人間の条件(La condition humaine)」、AL.は「アラトリステ I(El Capitán Alatríste)」、B.R.は「木のぼり男爵(Il Barone Rampante)」の略である。

¹⁶ 他に、以下の少数の例がある。フランス語 C.H. 左方転位主語 1 AL. 前置目的語 1 B.R. 前置主語 1 スペイン語 C.H. 左方転位主語 1 AL. 前置目的語 1

スペイン語

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語	倒置主語	属詞	名詞文	同格	分詞構文	副詞
C.H.	1567	690	328	148	85	179	95	22	13	6
AL.	864	348	269	49	45	79	38	20	8	7
B.R.	1684	659	455	78	172	173	63	42	20	22
計 (%)	4115 (100)	1697 (41.2)	1052 (25.6)	275 (6.7)	302 (7.3)	431 (10.5)	196 (4.8)	84 (2.0)	41 (1.0)	35 (0.85)

両言語において、文法的機能の割合はかなり共通していると言える。前置詞句が最も多く、いずれの言語においても4割を超えている。2位が直接目的語、3位が属詞である点も同じで、いずれの言語においてもそれぞれ4分の1、1割程度の割合を占めている。文法的機能として文において重要な働きをする主語は、いずれの言語においても4位である。主語の割合が低いのは、両言語の語順と密接な関係がある。両言語の基本語順はSVOであり、主語は動詞の前におかれる。文の命題内容を決定する働きをする動詞に先行する要素は、情報構造上は旧情報、特に主題(topic)として位置付けられることが多い。両言語の不定冠詞の特徴付けにおいて共通している点として、対話者が知らない情報、すなわち新情報を提示するという機能がある。つまり、主語の位置は本来不定冠詞が生起しにくい位置であると言えるのである。しかし、4位とはいえ主語が占める割合はフランス語で8.8%、スペイン語でも6.7%と決して無視できる数字ではない。これは、文の命題内容そのものが新情報として提示されることが少なくないためであると考えられる。

(27) a. ... : un insecte courait sur sa peau. 虫が彼の皮膚の上を走っていた。

b. ...porque una herida fea que tenía en un costado, recibida en Fleurus, aún estaba fresca...

なぜなら、フルリュスで受けた脇腹の醜い傷がまだ生々しかった

以上の例では、その前の文脈において「虫」や「傷」が言及されているわけではなく、命題全体が語りの展開の背景をなす新情報として提示されているので、不定冠詞が文頭である主語の位置に生起しているのである。

両言語で異なる傾向が見られるのは、倒置主語である。フランス語では3.6%であるのに対し、スペイン語では主語よりも高い7.3%を占めている。これは、両言語の語順に関する特性の相違に起因すると考えられる。スペイン語は動詞の主語に当たる要素が新情報として提示される場合、基本的な情報構造¹⁷に従って主語を動詞の後ろに置くことが一般的である。

(28) ...; pero lucía un grueso sello de oro en el meñique de la siniestra.

だが、左手の小指には大きな印章入りの金の指輪が光っていた。

¹⁷ 基本的な情報構造とは、文において、対話者が共有している旧情報を前に置き、対話者が知らない新情報を後ろに置くという語順を指す。

これに対して、フランス語は SVO という語順を固定化する傾向がスペイン語よりも強く、相対的に主語が動詞の後ろに置かれる頻度が低くなる。このため、両言語にこのような差が生じるのである。ただし、フランス語の場合も主語倒置が全く観察されないわけではなく、特に主題の働きをする要素が動詞の前に置かれた場合には、主語倒置が観察される。

(29) ... : sous son sacrifice à la révolution grouillait un monde de profondeur...

革命への供え物の下には、深い世界がうごめいていた

以上のことから、語順に関する性質の違いに関わる部分以外では、不定冠詞の分布に関して両言語に大きな差異は見られないと言える。

3. 2. 不定冠詞と別の冠詞が対応している場合

ここでは、冠詞体系全体における不定冠詞と他の冠詞との関係を見るために、それぞれのテキストで一方の言語の不定冠詞がもう一方の言語で別の冠詞に対応している例を観察していく。不定冠詞と無冠詞、不定冠詞と定冠詞、不定冠詞と部分冠詞の順に考察を進める。

3. 2. 1. 無冠詞が現れる場合

3. 2. 1. 1. フランス語の不定冠詞がスペイン語において無冠詞で現れる場合

フランス語において不定冠詞に導かれる名詞句が、スペイン語において無冠詞で現れる名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下ようになる^{18,19}。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語	倒置主語	属詞	名詞文	同格句	分詞構文
(%)	454 (100)	233 (51.3)	84 (18.5)	15 (3.3)	7 (1.5)	38 (8.4)	10 (2.2)	3 (0.66)	3 (0.66)
文法機能	副詞	前 →目	前 →同	目 →倒	倒 →前	目 →前			
(%)	3 (0.66)	14 (3.1)	3 (0.66)	5 (1.1)	3 (0.66)	14 (3.1)			

フランス語において不定冠詞によって導かれる名詞句のうち、対応するスペイン語が冠詞（無冠詞を含む）を伴う名詞句となっているのは 4239 例であり、この中でこのパターンが占める割合は 10.7%である。

3. 2. 1. 2. スペイン語の不定冠詞がフランス語において無冠詞で現れる場合

スペイン語において不定冠詞に導かれる名詞句が、フランス語において無冠詞で現れる

¹⁸ 以降では、表の総計欄において、全体の中で比較的高い割合を占めている機能についてのみ、その割合を合計数の下にパーセンテージで示す。なお、表中では以下のような略号を用いている：主（語）、目（的語）、前（置詞句）、倒（置主語）、属（詞）、（名詞）文、同（格句）、分（詞構文）。

¹⁹ 出現回数の低いものは以下のとおりである。前置詞句→主語 2 属詞→前置詞句 2 名詞文→前置詞句 2 名詞文→主語 2 前置目的語 1 前置詞句→倒置主語 1 前置詞句→名詞文 1 前置詞句→分詞構文 1 主語→目的語 1 主語→倒置主語 1 属詞→目的語 1 名詞文→同格句 1 分詞構文→前置詞句 1 同格句→目的語 1 副詞用法→目的語 1

名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下ようになる²⁰。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	倒置主語	属詞	名詞文	同格句	分詞構文	目→前	前→目	属→文	属→同
	129	62	27	2	8	5	3	3	5	2	2	2
(%)	(100)	(48.1)	(20.9)	(1.6)	(6.2)	(3.9)	(2.3)	(2.3)	(3.9)	(1.6)	(1.6)	(1.6)

スペイン語において不定冠詞によって導かれる名詞句のうち、対応するフランス語が冠詞を伴う名詞句となっているのは 3885 例であり、この中でこのパターンが占める割合は 3.3%である。

3. 2. 1. 3. 不定冠詞と無冠詞の関係

2.4 で述べたように、両言語における不定冠詞と無冠詞の対応関係を観察すると、スペイン語において無冠詞名詞句で生起する割合が高いことが分かる。これを文法機能に分類して比較すると、前置詞句・直接目的語・属詞の順になっている点は同じであり、三者の全体に占める割合を比較すると大きな差はないと言える。1.2 で述べたように、スペイン語においてはフランス語の部分冠詞単数形に該当する要素がないことと、部分冠詞複数形の使用が義務的でないことから、相対的にフランス語よりもスペイン語の方が無冠詞名詞句が生起する割合が高くなるのは当然である。

しかし、非連続的な要素を表す名詞句の単数形については、両言語において不定の決定詞として不定冠詞単数形が用いられる点は共通している。従って、上記の無冠詞名詞句の割合の差は、両言語の冠詞体系の違いとは別の要因によると考えられる。その要因の一つとして挙げられるのは、スペイン語では特定の不定形容詞が生起する場合に不定冠詞が用いられないという制約である²¹。ただ、この制約が適用されるのは、前置詞句 233 例のうち 39 例、直接目的語 84 例のうち 34 例、属詞 38 例のうち 3 例となっており、この制約の存在だけでは無冠詞名詞句の割合の差を説明することはできない。

そこで、それぞれの言語において無冠詞名詞句で現れる名詞が非連続的な物体や概念を指示する名詞か、連続的な物質もしくは概念を指示する名詞かを観察してみる。スペイン語における無冠詞名詞句全 249 語中、連続的な要素を指示する名詞が 59 個に対して、非連続的な要素を指示する名詞は 154 個に及んだ²²。これは、スペイン語においては、本来不定冠詞が用いられるべき文脈においても無冠詞名詞句が用いられる傾向があるということの意味する。

これに対して、スペイン語で不定冠詞を伴って現れる名詞で、フランス語において無冠詞で現れる名詞は 109 語である。この中で非連続的な要素を指示する名詞の単数

²⁰ 出現回数の低いものは以下のとおりである。副詞的用法 1 前置詞句→同格句 1 前置詞句→副詞的用法 1 目的語→属詞 1 目的語→同格句 1 倒置主語→前置詞句 1 倒置主語→目的語 1 属詞→前置詞句 1

²¹ 具体的には、「otro (他の) », « tal (そのような) », « cierto (ある) », « semejante (そのような) » である。

²² 非連続的な要素を指示する名詞の総数は 190 個であったが、この中でフランス語における単数形がスペイン語で複数形になっているものが 36 個あった。数が変わると単純な比較ができないため、ここではこの数を除外してある。

形は 91 語である。スペイン語の場合よりも総数が少ないのでこの数字は少なくなっているが、フランス語においても非連続的な要素を指示する名詞の単数形が無冠詞で現れることが決して少なくはない。この理由としては、主に二つの要因が考えられる。一つは、「en」、「de」という無冠詞名詞句と相性がいい前置詞があるという点である。前置詞句 63 語中 52 語(82.5%)がこの二つの前置詞によって導かれる名詞句である²³。第二点は、「rendre service à (～に役立つ)」、「avoir besoin de (～を必要とする)」、「faire appel à (～に助けを求める)」のように、無冠詞の直接目的語が動詞とともに語彙化された動詞句を形成している例が多いという点である。

以上の考察から、フランス語における無冠詞名詞句は語彙的に決定される場合が多いのに対して、スペイン語の無冠詞名詞句は冠詞体系において統語的に一定の機能を果たしていると言えよう。

3. 2. 2. 定冠詞が現れる場合

3. 2. 2. 1. フランス語の不定冠詞がスペイン語において定冠詞で現れる場合

フランス語において不定冠詞に導かれる名詞句が、スペイン語において定冠詞に導かれる名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下のようなになる²⁴。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語	倒置主語	分詞構文	前→主	目→前	目→主	目→倒	主→前
(%)	164 (100)	84 (51.2)	25 (15.2)	4 (2.4)	4 (2.4)	4 (2.4)	3 (1.8)	9 (5.5)	4 (2.4)	3 (1.8)	5 (3.0)

フランス語において不定冠詞によって導かれる名詞句で、対応するスペイン語が冠詞を伴う名詞句となっている 4239 例の中で、このパターンが占める割合は 3.9%である。

3. 2. 2. 2. スペイン語の不定冠詞がフランス語において定冠詞で現れる場合

スペイン語において不定冠詞に導かれる名詞句が、フランス語において定冠詞に導かれる名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下のようなになる²⁵。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	属詞	同格句	分詞構文	前→目	前→主	目→前	目→主	倒→主	属→主
(%)	170 (100)	65 (38.2)	41 (24.1)	4 (2.4)	4 (2.4)	4 (2.4)	4 (2.4)	4 (2.4)	10 (5.9)	6 (3.5)	3 (1.8)	9 (5.3)

スペイン語において不定冠詞によって導かれる名詞句で、対応するフランス語が冠詞を伴

²³ スペイン語において対応する前置詞「en」、「de」によって無冠詞名詞句が導かれる例は、前置詞句全体の 233 語中 105 語(45.1%)と割合が低く、他の前置詞によって無冠詞名詞句が導かれる例も多いと言える。

²⁴ 出現回数の低いものは以下のとおりである。属詞 2 前置詞句→目的語 2 前置詞句→倒置主語 2 目的語→名詞文 2 属詞→主語 2 同格句 1 前置詞句→属詞 1 前置詞句→分詞構文 1 目的語→属詞 1 目的語→分詞構文 1 主語→倒置主語 1 前置主語→目的語 1 倒置主語→前置目的語 1 名詞文→主語 1

²⁵ 出現回数の低いものは以下のとおりである。倒置主語 2 副詞的用法 2 前置詞句→分詞構文 2 属詞→目的語 2 主語 1 名詞文 1 前置詞句→属詞 1 主語→属詞 1 属詞→前置詞句 1 属詞→前置主語 1 名詞文→主語 1 同格句→主語 1

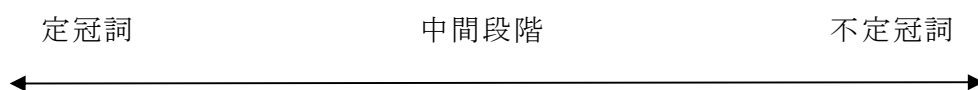
う名詞句となっている 3885 例の中で、このパターンが占める割合は 4.4%である。

3. 2. 2. 3. 不定冠詞と定冠詞の関係

フランス語の不定冠詞がスペイン語において定冠詞で表される例と、スペイン語の不定冠詞がフランス語において定冠詞で表される例を対照すると、全体に対する割合に大きな差はない。1 節で見たように、本来この二つの冠詞は情報伝達上相反する機能を果たすという関係にあるはずである。にもかかわらず、4%前後の割合で交替が見られるという事実はどうのようにとらえられるであろうか。

まず考慮に入れねばならないのは、両言語のテキストにおける構文上の問題である。翻訳という作業の特質上、二つのテキストの間で構文が変わっていることが少なくない。例えば、フランス語において前置詞句であるものがスペイン語において主語名詞句で表現されているといった場合である。このような場合、名詞句の文法的機能と冠詞の親和関係が関与してくる。すなわち、動詞の前に置かれる主語名詞句は談話において既に導入されている既知の要素である場合が多く、不定冠詞より定冠詞が用いられる場合が多いという傾向である²⁶。主語名詞句において定冠詞が用いられている例は、フランス語が 25 例(定冠詞全体の 14.7%)、スペイン語が 11 例(同 6.7%)となり、一定数は観察されるが全体に占める割合は決して高いとはいえない。全体に占める割合を見ると、前置詞句・直接目的語が上位 2 位を占めており、不定冠詞全体や無冠詞の場合と共通している²⁷。このことは、定冠詞の分布が何らかの文法機能と特に強い関係をもっているとは言えないことを示している。

また、フランス語とスペイン語とで不定冠詞が定冠詞で表される頻度を比較してみると、フランス語 4.4%に対してスペイン語 3.9%と、それ程差が見られない。1 節で述べたように、両言語において定冠詞の機能は本質的に共通している。このことから、不定冠詞と定冠詞は一般的には相反する機能をもっているとは言えるものの、実際には両者の使用範囲の境界は明瞭なものではなく、中間的な場合が存在すると考えられる²⁸。つまり、定冠詞と不定冠詞の使用の決定は、以下に示される連続的なスケールをもとになされるということになる²⁹。



²⁶ この傾向を裏付ける事実として、不定冠詞全体の分布における主語名詞句の割合がフランス語が 8.8%、スペイン語が 6.7%と、前置詞句や直接目的語と比べて著しく頻度が低いことが挙げられる。

²⁷ 他の場合と異なるのは、3 位を占めるのが属詞ではなく直接目的語から前置詞句へと転換された例である。場所・時間をはじめとする状況や様態等を表すことの多い前置詞句は、直接目的語に比べて既知の情報となっている場合が多いことから、定冠詞との親和性が高いため上位を占めていると言えよう。

²⁸ 査読者から、両言語の定冠詞の用法に違いがあるためにこのような結果となった可能性があるとの指摘があった。この可能性は完全に否定できるものではないが、もし両言語に定冠詞の機能上の差異が生じるのであれば、本稿が考察している不定冠詞との交替について数値的にある程度の不均衡が生じることが予想される。しかし、実際にはそのような数値的な不均衡は認められないので、定冠詞の用法について両言語間で大きな差異があるとは考えにくいと言えよう。

²⁹ 査読者から、このスケールがそれぞれの言語でどのようなものであるかをより具体的に示す必要があるとの指摘があった。これは、定冠詞の分布を詳細に検討した上でないと実現不可能なものであり、今後の課題としたい。なお、ここで示した中間段階とは不定冠詞と定冠詞が交替可能な場合であり、(30)、(31)で示した例の他に、総称用法がこれに含まれる。この点は両言語に共通しており、基本的にはこのスケールはフランス語とスペイン語で共通したものであると考えられる。

この中間段階に位置する典型的な例としては、名詞が修飾要素を伴う場合である。

- (30) a. Le ministre prit dans un tiroir de son bureau une boîte de caramels mous,...
大臣は机の引き出しからキャラメルの箱を取り出し、
b. El ministro sacó del cajón de su mesa una caja de caramelos,...
- (31) a. una cuchillada corta como un relámpago que no daba tiempo ni a pedir
confesión 相手に告解のための猶予も与えない稲妻のような短剣による一撃
b. un coup vif comme l'éclair qui ne vous laissait même pas le temps de
demander la confession

これらの例では、「箱」・「稲妻」はそれまでの文脈において提示されていない未知の情報であることから、不定冠詞が用いられる文脈と合致すると言える。しかし、名詞に後続する修飾要素によってその指示対象が後方照応的に特定化されるため、定冠詞の機能とも矛盾しない統語的環境なのである。

3. 2. 3. 部分冠詞が現れる場合

3. 2. 3. 1. フランス語の不定冠詞がスペイン語において部分冠詞で現れる場合

フランス語において不定冠詞に導かれる名詞句が、スペイン語において部分冠詞に導かれる名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下ようになる³⁰。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語
(%)	11(100)	5(45.5)	3(27.3)	2(18.2)

フランス語において不定冠詞によって導かれる名詞句で、対応するスペイン語が冠詞を伴う名詞句となっている 4239 例の中で、このパターンが占める割合は 0.26%である。

3. 2. 3. 2. スペイン語の不定冠詞がフランス語において部分冠詞で現れる場合

スペイン語において不定冠詞に導かれる名詞句が、フランス語において部分冠詞に導かれる名詞句に対応している例を、名詞句の機能ごとに分類すると以下ようになる³¹。

文法機能	全体	前置詞句	目的語	主語	前→目
(%)	30 (100)	11 (36.7)	7 (23.3)	2 (6.7)	2 (6.7)

スペイン語において不定冠詞によって導かれる名詞句で、対応するフランス語が冠詞を伴う名詞句となっている 3885 例の中で、このパターンが占める割合は 0.77%である。

3. 2. 3. 3. 不定冠詞と部分冠詞の関係

不定冠詞が部分冠詞に対応している例は、全体の中で極めて低い割合しか占めていない。従って、基本的にはこの両者は交替が難しい関係にあると言ってよい。

スペイン語には部分冠詞単数形がないため、フランス語の不定冠詞がスペイン語で部分冠詞で表現されている例においては、単数から複数への数の転換が行われているということになる。両言語において数という文法カテゴリーは様々な部分で形態的に

³⁰ 出現回数の低いものは、属詞→前置詞句 1 である。

³¹ 出現回数の低いものは以下のとおりである。倒置主語 1 属詞 1 前置詞句→属詞 1 目的語→前置詞句 1 倒置主語→目的語 1 属詞→目的語 1 属詞→倒置主語 1 名詞文→前置詞句 1

具現化されるものである。単数と複数の区別は文法においてかなり重要な位置を占めていると言える。このため、0.26%という極めて低い確率でしか見られないと考えられる。

フランス語においては部分冠詞には複数形の他に単数形も存在するため、数の転換が行われずともスペイン語の不定冠詞から部分冠詞への交替が可能であるが、実際には0.77%と低い割合である。これは、非連続的な要素を指示する不定冠詞と連続的な要素を指示する部分冠詞単数形との機能分化がかなり明確になされていることを示していると言える。数という文法カテゴリーが明示化される言語においては、必然的に連続的な要素と非連続的な要素の区別が重要となる。このため、この区別をいわば無効化する不定冠詞と部分冠詞の交替があまり観察されないと考えられる。

4. 結論

フランス語とスペイン語における不定冠詞の分布と他の冠詞との対応関係をもとに、両言語における冠詞体系を対照的に考察してきたが、相違点と共通点は以下のようにまとめられる。

相違点 i) フランス語においては無冠詞のもつ機能がかなり制約されており、語彙的に決定されるものが多い。

ii) スペイン語においては連続的な要素を指す不定の名詞句を導く部分冠詞単数形が存在せず、無冠詞がこの機能を担う。また、無冠詞は非連続的な要素を指す単数の不定の名詞句を導く機能も担う。

共通点 i) 文法機能ごとの不定冠詞の分布について、大きな差異は観察されない。

ii) 不定冠詞と部分冠詞との機能の分化はかなり明瞭である。

iii) 不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく、両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものである。

以上の点から課題として浮かび上がるのが、スペイン語における不定冠詞と無冠詞の機能分化の問題である。これには、無冠詞名詞句の分布を中心に据えた考察が必要となる。また、定冠詞と不定冠詞の機能の連続性についても、定冠詞の分布から見た考察が不可欠である。これらの課題については、稿を改めて論ずることとしたい。

参考文献

- Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold, London.
- De Bruyne, Jacques (1995) *A Comprehensive Spanish Grammar*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Deloffre, Frédérique et Jacqueline Hellegouarc'h (1988) *Éléments de linguistique française*, Editions C.D.U. et SEDES réunis, Paris.
- Grevisse, Maurice (1993) *le bon usage*, Duculot, Paris.
- Hernández Alonso, César (1984) *Gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- Hollerbach, Wolf (1994) *The Syntax of Contemporary French*, University Press of America, Lanham.
- Judge, Anne and F. G. Healey (1995) *A Reference Grammar of Modern French*, NTC Publishing

- Group, Lincolnwood.
- Laca, Brenda (1999) “Presencia y ausencia de determinante”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.891-928, Espasa, Madrid.
- Leeman, Danielle (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.
- Leonetti, Manuel (1999) “El artículo”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.787-890, Espasa, Madrid.
- López García, Ángel (1998) *Gramática del español III. Las partes de la oración*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Martinet, André (1979) *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, Paris.
- Martínez Álvarez, Josefina (2000) “Nombres discontinuos y artículo”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.299-305, Editorial Ariel, Barcelona.
- Matte Bon, Francisco (1995) *Gramática Comunicativa del español Tomo I*, edelsa, Madrid.
- Price, Glanville (2003) *A Comprehensive French Grammar*, Blackwell Publishing, Malden.
- Salvá, Vicente (1988) *Gramática de la lengua castellana I*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Satorre Grau (2000) “El artículo”, in Alvar, Manuel, *Introducción a la Lingüística española*, pp.271-298, Editorial Ariel, Barcelona.
- Wagner, Robert Léon and Jacqueline Pinchon (1991) *Grammaire du Français classique et moderne*, Hachette, Paris.
- 寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』, 大学書林, 東京.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail：fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学